
最後の一時間

隆史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の一時間

【Zコード】

Z2263BA

【作者名】

隆史

【あらすじ】

裕介と理沙と幸樹は3時間前、ネットに突如現れた『暗号文』を見つける。

解析すると、それは殺人ウイルスが散布されるまでのカウントダウンだった。

タイムリミットまで残り

【00・59・59】

目の前にあるパソコンに映し出される数字が、とうとう一時間を迎つた。

裕介と幸樹は、3時前にこの『レーティード』を見つけ、理沙も交えて、『コード』の発信源を見つけ出した。

先月22歳になつたばかりで、小説家の理沙は、

「まるで小説のような内容ね。人類を危機に落とし入れるウイルスに対して、一般人が後一時間で散布を防ぐ・・・。そんなこと私たちに出来るかしら」

やや不安そうにつぶやくと、同じく22歳の天才クラッカーで『レーティード』を見つけた幸樹は、

「想定外のことが起こらない限り、この作戦なら何とかなると思いますよ」

と言つた。

そして、二人と同様に22歳の裕介は、

「発信源は大阪府交野市の、上空。さつきも見たけど、ありや空中要塞だな・・・。幸樹、へりは呼べたのか?」

と言い、幸樹はこういった。

「ああ、呼べたよ、私部グランドに停まつてはいるはずさ。なんせ上層部からの命令だ、警察は動くしかないだろ。僕のクラッキング技術を甘く見るなよ」

「そうだな。理沙、幸樹」

裕介は、確認を取るようにつにそつにいつてから、

「後一時間で、世界を救うぞー。」

*

タイムミリットまで残り

【00:51:42】

裕介と理沙は何も持たず、幸樹は小型のノートパソコンを持って、ヘリが着陸している私部グランドに到着した。

「ほんとだ大丈夫だろ?」

裕介は幸樹に質問すると、

「ああ、問題無いつて。ヘリの操縦士は僕たちのことを、どうかのお偉いさんだと思ってるから。といつより、あんなとこに行くのに手ぶらのことの方が心配だけね」

そう答え、幸樹はヘリの扉を開けて中に入る。

裕介は、理沙も入ったことを確認すると、離陸するよう操縦士を促した。

操縦士は、とくに疑問を抱かなかつたようで、そのままプロペラを回しゆつくりと上昇していく。

見る見るうちに、グランドの隅に植えられた枯れ木が小さくなつてゆく。

「ねえ、今喋つたら操縦士にも聞こえる?」

「聞こえませんよ」

じゃあ、と理沙はわざとまで家で話していた作戦を、確認するふう、元の

「まず、NASAの衛星写真から推測すると、空中要塞の直径は約700メートル、中心にある高さ250メートル程の円柱はおそらく中枢塔ね」

「理沙の言つとおり、そこから『トーポード』が発信されたんだ

「う

「うん。それとその中枢塔を囲む幾重もの外壁が一番の難関かも

ね

そういうている間に、空中要塞の上にたどり着き、その全景が見えてきた。

土台となる逆円錐の上には、RPGを連想させる薄く桃色に光る中枢塔に、それを取り囲むように一周する白銀の外壁、地面を覆いつくす若葉色の草原が広がつたいた。

外壁が反射する太陽光に田を細めながら、裕介たちは着陸できそうな場所を探す。

今は、この絶景に感動している時間はない。

すると視界の端、300メートルほど西の方向で、ヘリを揺らすほど爆発が起きた。

爆発の煙で、空中要塞が隠れる。

「きやあ！ な、なに！？」

理沙が悲鳴を上げる。

すると裕介が、

「あれはテレビでみたことがある、在日米軍だ！ この要塞に気づいたか。でもまさかあの空中要塞を交野市に落とすつもりなのか？」

「ああ、たぶん大阪府一帯に避難勧告が出てるから、そうなんじやないか」

白銀の外壁は今頃崩れてしまつてこらだらうと裕介たちは思ったが、煙が晴れてみると、白銀の外壁どころか地面にある草原にも、傷一つ付いていなかつた。

「どうしたことなんだ？」

裕介が、睡然とつぶやくと、再びミサイルが空中要塞に突っ込んだ。

しかし、傷はつかない。

よく見ると空中要塞からも迎撃ミサイルが飛んでいたのだ。

その後も、何十発といつミサイルを、空中要塞はすべて迎撃していた。

「あのミサイルの命中率は半端じゃねえな。それに爆音が耳に響く

」

裕介は、ヘッドホンの様な機器の上から耳を押さえ、耳を細める。その隣で同じじよつに耳を押さえていた幸樹は、

「いや、これはちよつと良いかもしねない。今なら東側が開いているだろ?」

「あのミサイルで、このへりを潰されたりしないの?」

「ミサイルだけだと思つぜ。米軍の戦闘機も上空を通過しているけど、一機も落ちてない!」

ほとんど言ふように会話をしていた裕介たちは、意を決し、操縦士に指示する。

「要塞の東端に着陸してください」

*

タイムコントローラまで残り

【00:39:29】

裕介たちを乗せたヘリがゆっくりと下降していく。

ヘリは、外壁の外側の若葉色の草原に着陸し、3人を降ろすと、すぐに飛び去つて行つた。

裕介は、冬なのに青々と茂る草と土に驚きながら、

「大丈夫つて分かつても、あの外壁の威圧感はすごいな」

「うん。しかも、あのピンクの塔がここからでもすぐ綺麗に見えるね」

「そうですね。こちまで聞こえる爆発音さえ無ければ、後40

分も無い事を忘れそうです」

「・・・・・」

「おい裕介、ほんとに忘れてたんですか?」

「い、いや、わ、忘れてなんか無いぞ。それより早くしようぜ」

「そうだよ。幸樹。早くしないと・・・・・」

「

幸樹は、半分あきれたようにため息をついて、

「じゃあ、さつそく空中要塞を攻略するとしましょ」

と言い。太陽光を鋭く反射する白銀の外壁に向かつて歩き出す。裕介と理沙も遅れないように早歩きで幸樹の背中を追いかける。

白銀の外壁までは数十メートルで大した苦労なんて無かったが、近づいてみるとよくわかる、この外壁は10メートルを越えるような高さだ。

やはり門も、普通より大きい。裕介は、巨人かなにかが居るのかな？と思つたが、門のすぐそばまで行くと、その見解を改めざるを得なかつた。

白銀の外壁と同じ、硬く閉ざされた白銀の門には、巨人には小さすぎる人間の手のひらサイズの近未来的な電子機器が3つ並んでいて、左右には黒、真ん中のパネルだけが赤く点滅していた。

「セキュリティロックみたいだね。ちょっとまってて」

そういうと幸樹は、なにやら線を門にある穴に突つこんで、パソコンをいじりだした。

そして、ものの1分で、赤く点滅していたパネルが緑になつた。

「よし、分かった……これは、この門の他にある北北西と南南西にある門のロックも解除しないといけないんだ」

それにいち早く反応したのは理沙だった。

「つて言うことは、3手に分かれないといけないの？」

と、不安そうに言う理沙に対して、裕介は、

「俺がついてやりたいが、そうするしか方法がないんだつたら仕方ないだろ」「

「裕介……理沙……お前たちには悪いがこうするしかない。

僕は北北西、裕介は南南西の門に行つてくれ」

「ああ、理沙は比較的安全なこの門で待つてくれ。ついたら連絡するから」

「うん、気をつけてね……。あ、裕介、これ」

そういうつて理沙は、コートの中から水筒を取り出した。

「なんだこれ？」

裕介は、そういうながら水筒のふたに注がれたお湯を飲み。

「ただのお湯よ。それぐらいしか用意できなかつたの」

「理沙ありがとう、おかげで随分温まつたよ。幸樹もいるか？」

裕介は、幸樹にもすすめたが、

「僕は結構です。けど、理沙…………まあいい。裕介、ついたら僕に電話してくれ、ロックの解除はそこまで難しくないはずだ」

「わかった。じゃあ理沙と幸樹、中枢塔で会おう」

幸樹と裕介はそういうつて、出来る限りの速さで走りでした。

*

タイムリミットまで残り

【00：33：36】

空中要塞の直径は700メートル、外壁の円周は約1・8キロメートル、門は三つでそれぞれ均等に分かれているから、門から門までおよそ600メートル強。

西に行くにつれて、爆発音が大きくなる。しかし、激しさは衰え最初の弾幕のようなミサイルの帶は消えていた。

それを視界の端に入れながら、裕介は、ただひたすら走り続け、南南西の門にたどり着いた。

この門も3つのパネルが並んでいて、左が黒、中央が緑、右が赤く点滅していた。

そこで連絡することを思い出した裕介は、ケータイを取り出して、

「理沙、俺は無事だ。そつちは大丈夫か？」

「え、うわ！」

「どうした理沙！？」

「ううん、また水筒のふたを無くしたかと思つて……」

「なんだ良かつた。幸樹から連絡はあつたか？」

「いえ、まだ無いわね。裕介のほうが早かったんじゃないの？」
「じゃあこっちから連絡してみるよ。じゃあ」と、理沙と話し終わると、

ピッ、と電子音が鳴り、左のパネルが縁に変わった。

そしてすぐ後に、幸樹から電話がかかってきた。

「裕介、こっちはできましたよ。そっちはわかるかい？」

「いや、さっぱり」

「なら赤く点滅しているパネルの上に書いてある4桁の数字を教えて下さい。こちらで計算しますので」

「えーっと、5238だな」

裕介がそういうと、幸樹はちょっとと考えた後に、「0014と入力したら開くはずです」

裕介は、幸樹の行つた通りの数字をパネルに打ち込んだ。すると、点滅していたパネルが、電子音と共に縁に変わり、硬く閉ざされていた門がゆっくり開いた。

裕介は、一旦幸樹との電話を切り、理沙に掛ける。

「理沙、門は開いたか」

「ええ、今開いたよ」

裕介は、門の中に足を踏み入れながら、「じゃあ、さっさと中枢塔で会おうな

「うん。ゆう・・・す・・・・・」

ツーツーツーツと、突然電話が切れた。

裕介は、理沙に何かあったのかと思ったが、よく見ると、圏外だった。

「ここからは完全に一人で、中枢塔に行かないといけないのか」

門の中に一端入つてみると、そこは衛星写真やヘリから見た風景とは全く違っていた。

田の前には、白銀を基調とした中世の町並みが広がつており、後ろにそびえる白銀の壁が無ければ、ここが空中要塞ということを忘

れていたかも知れない。

それに加えて、門に入るまで聞こえていた爆発音が、どこか遠くの雷のように小さく聞こえる程度になっていた。

裕介は誰か来ないかと身構えたが、聞こえるのは小さな爆発音だけで、人の気配は一切無かつた。

裕介は壁がいくつも立ちふさがっていると思っていたので、障害がなさそうで少し安心したが、問題はそれだけでなかつた。

この町の住人ならほとんど一瞬で中枢塔までいけたのかも知れないが、初めて来たものにとつてここは、白銀の迷路だつた。

といつても、所詮は町なので、罠に遭つたり出られなくなつたりすることは無く、外壁から中枢塔までの直線距離300メートル（実際に走つた距離はそれ以上）を7・8分で通り抜けることが出来た。

*

タイムリミットまで残り

【00：21：18】

塔の根元に着いたが、裕介の予想より時間がかかってしまった。理沙はもう着いているだろうか、裕介は淡くピンクに光る塔を東側に歩いてく。

着いてみても、そこに理沙の影は無く、あるのは塔の入り口との隣に刻まれた文字だけだ。

「アルス・フォルン・・・・・・この空中要塞の名前か？」

裕介は、そうつぶやき辺りを見ながら、理沙が現れないか確認するが、一向に現れる気配が無い。

「理沙も幸樹も、さきに行つちまつたのか？ まあ、匕つちにしろ早くしたほうがいいのは確かだな」

理沙のことを少し心配しながら、『アルス・フォルン』の中枢塔の門を押し開ける。

「なんだ、こつちは開いてるのか」

中に入ると、そこはホールのように開けていて、奥の一角だけ個室が並んでいる。

ここまでくると、爆発の音は聞こえず、自分の心臓の動きや乱れた呼吸だけが耳に入つてくる。

裕介は、個室の中を確認するが、『レトコード』を発信できるような端末は、発見できなかつた。

「ここじゃないのか・・・・じゃあ、あの螺旋階段の上か」
裕介は、ホールの脇にあつた螺旋階段を使い、上の階へ行くが、そこも何も無いだだつ広い空間があるだけだつた。

その後も、裕介は上り続けたが、とうとう30階に到達したころには、もう足が攣りそつだつた。

「なんで、エレベーターがねえんだよ！」

裕介は、かなり今更なことに毒づいたが、そう都合よくエレベーターが・・・来るはずも・・・・な・・・・く・・・
シューイィイインと、静寂を破るような機械音が下から上がつて来るなんてありえ・・・・・・・ない。

ましてや、ホールの中央にある円がパックリ開いて、そこから理沙を乗せた浮遊物が、上へ上へと昇つていくなんて信じられない。

「理沙あああああああーー！ 待てコラあああーー！ ギヤああ攣る、攣る！！」

裕介は、叫んだが、理沙の耳には届かなかつたようだつた。

しかし裕介は、最後の力を振り絞つて、重い足を引きずりながら、部屋の中央に行く。

中央の円に着くと、複雑そうな電子パネルが浮かび上がる。

裕介は少し怯んだが、手早く『2012』と打ち込む。

だいたい27階あたりで手に入れた暗号だ。

ガコーンと、一度音がした後、中央の円がそのままゆっくりと浮かび上がり、裕介を乗せたまま上昇していった。

*

タイムコントラストまで残り

【00・06・35】

裕介が、最上階と思われる階層につくと、今までとは違ひ雰囲気の空間だった。

今までの階は白く明るい部屋だったが、この階は薄暗く、壁の色なども黒で統一された、対称的部屋だった。

裕介が居るのは、その部屋のちょうど真ん中であり、見渡してみると壁際を大型の機械が埋め尽くしていた。

その中に、裕介は一人の人影を見つけた。

「理沙。それが『LTコード』を送った機械なのか？」

「え、あ、裕介！ 遅かつたじやない。幸樹もなかなか来ないし・・・・・私機械とかわかんないし・・・・・」

裕介が、理沙のところに行こうとするとき、足元に錆びた水筒のトップを見つけた。

理沙と別れるときにお湯を飲んだのと同じやつだ・・・・・

「なあ、理沙。これお前のじやなかつたけ？」

裕介は、そのコップを持ち上げ理沙に見えるようにして言った。
「え・・・・・！」

裕介は、理沙にそんな反応をして欲しくなかつた。

裕介は、理沙を疑つてしまつ。

一度疑問に思うと次から次へと、頭に浮かび上がつてくる。

「なあ、理沙。なんで、ここにお前のコップがあるんだ？ その疑問の一つを理沙に問いかけると、理沙は、
「たぶん、わざわざここに来たときに落としたのよ。」
と言つ。

しかし、それは裕介が考える答えことなり近くなる回答だった。

「じゃあ、コップに錆びが付いてるのはどういう訳だ？ そうだ
らう理沙」

裕介は理沙に近づいていきながら、考える。

なぜ俺は理沙に詰め寄ってるんだ！？

大好きなあいつを否定もしないで疑うのか？

なぜ俺の口は、勘違いだつたと言えない！？

どうしてこんなときだけ頭の回転が速くなるんだよ！

裕介は、意思に反して理沙を追い詰める。

「俺が30分前お湯を呑んだとき、コップは鎧なんて付いてなかつた。24分ぐらい前もそうだ、お前は『また水筒のふたを無くしたかと思って……』と言つた」

胸が押さえつけられるような圧迫感が心を締め付ける。

それでも裕介は話す。

「理沙、お前は一度ここに来たことがあるんだな」

そう言い切つても、理沙は表情を変えずに、口を開く。

「…………ええ。半年前よ。わたしはここまで来た。そのときはここの大井から入ったの」

「半年前だと？　ここが現れたのは3時間前だぞ」

「姿を現したのは……ね。実際はずつとここにあったのよ、それも紀元前から。隅々まで調べたわ。この要塞の名は『アルス・フォルン』それ以外にも分かったことはたくさんある。この要塞はほんの数瞬だけ現れることがあること……」

理沙はそこまで言うと一度深呼吸した。

その隙間に裕介は、

「どこにとは理沙が本当に『ルートコード』を送り出したのか？」
と言いつと理沙は、

「そ……それは……」

と言いかけ、言葉を詰まらした。

すると、

「それは、半分正解で、半分不正解だ」と、後ろの螺旋階段の下から足音が聞こえてきた。

*

タイムリミットまで残り

【00：02：47】

カツン、カツンと階段を上ってきた幸樹がそう言った。

「理沙が言わないなら、僕が話そう。いいよね」

幸樹が、そういうと理沙は少しだけ首を縦に振る。

「理沙が、『LTコード』発信したのは正しいが、意図的に送りだしたんじゃないんだ。操作ミスだよ。気づくと『LTコード』は発信されていたんだ」

「ほんとのか理沙？　だつたらなんで俺に相談してくれなかつたんだ？」

「あなたに・・・裕介に嫌われたくなかったから・・・人類という一つの種族を滅ぼしてしまったのは私のせいだ、なんてあなたに言えるはず無かつた・・・」

理沙は今にも泣きそうな顔でそういった。

「だから理沙は、半年前僕に相談してきた。あの時は、いつ終わりが来るか分からぬまま、『アルス・フォルン』の再度出現を待つた。そして三時間前に現れた」

そういうながら、幸樹は手早くPCを端末に繋げる。
PCには、『クラン計画』と表示されている。

「クラン計画？」

「ああ、これは裕介が『LTコード』と名づけた文章だよ。もともと『アルス・フォルン』にあった計画さ。last time
コード、か、いいネーミングセンスしてるよホント」

「おいつ、もう一分切ってるぞ！」

「わかつてゐる」

裕介は、額に汗が流れるのを感じながら、幸樹の高速な指捌きを見つめていた。

一方理沙は、目を硬く瞑り祈るように手を合わせている。

「よし、後一つだ！」

幸樹は、『クラン計画』のセキュリティを次々にやぶつしていく。

しかし、

「パスワードが、分からない・・・」

「どういうことだ！？」

「今までの4桁の数字とは違うんだ。そもそも数字なのか・・・意味のある文字なのか・・・何をいれれば良いか分からない！」

「じゃあ『アルス・フォルン』は？」

「もう入れたが、間違つてた」

「『クラン計画』は！」

「ダメだつた！」

裕介と幸樹は、舌打ちし、奥歯をかみ締める。

「他にヒントはなかつたか？」

裕介の願いに答える音は無く、沈黙に支配される。

*

タイムコミットまで残り

【00:00:40】

「裕介！ もうなにも思いつくことは無いのか」

「ああ、分からない！ 理沙は・・・理沙は何か思いついたか？」

次の手が出せなくなつた裕介は、振り返り理沙を見ると、

「ううん・・・何も・・・思いつかない。」「・・・」「めんなさい・・・私のせいで・・・ううつ・・・」「こねんなさい・・・」「めんなさいごめんなさい・・・」「！」

そのまま号泣して地面にうずくまつてしまつた。

顔を覆つた手の隙間からボロボロと涙が流れ出す。

「理沙！ 大丈夫だ。お前のせいなんかじゃない！ 僕こそ・・・

「ごめんな、理沙がこんなに苦しんでる」とにも気づかないで・・・

裕介は理沙を抱擁する。

最後に流した涙が後悔のせいなんて、あまりにも悲しすぎる。

「・・・・・・・・・・」

残り数秒が無限にも感じられる静寂のなかで、裕介は理沙を抱きながら、

「理沙・・・実はお前にまだ言つてないことがある・・・」

出来る限りやさしくそう言つと、

「えつ？」

裕介の言葉に理沙は顔を上げる。

「俺は・・・ずつと、お前のことが好きだった・・・」

「・・・・・私も、私も。裕介のことが大好きだったよ

そうして、理沙の涙の理由が変わった。

裕介と理沙は、自然と互いに唇を近づける、

「んつ・・・」

二人はキスをしたまま目を閉じ誓う。

目を閉じる前に見た、大好きな人の顔は、人類が滅亡しても、絶対に、忘れないと・・・

その数瞬後、熱くなつていいく意識に響く、無慈悲なタイムアウトを示す電子音を聞いた。

同時に『アルス・フォルン』から放たれた光と共に、人類の歴史は終焉を迎える。

「大地の歴史は再び振り出しに戻る・・・か・・・・。何度・・・
何度も繰り返せば気が済むのだ！ ウィリアス・レヨンバード！』

(後書き)

最後まで読んでいただけたら、感想を書いてください。
まだまだ素人なので、そういうのが一番力になります。

それに、この話は、かなりとばして書いたので、誤字脱字等々、読みにくいところや意味の伝わりきらないところも多々あると思いま
すが、そういうのがあれば感想に書いていただけると、加筆修正し
ます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2263ba/>

最後の一時間

2012年1月5日19時47分発行